

二大帝国の対立から融和へ

——セルバンテスの『偉大なるスルタン妃』に関する一考察——

三 倉 康 博

(受付 2012年10月18日)

1. はじめに

ミゲル・デ・セルバンテス・サアベドラ (Miguel de Cervantes Saavedra, 1547-1616) は、その5年間のアルジェ虜囚生活 (1575-80) の影響から、帰国後の人生においてイスラーム世界に強い関心を持ち続け、それを自らの創作活動に反映させた。そして17世紀初頭に¹、オスマン帝国の首府イスタンブル (旧コンスタンティノープル) を舞台にした重要な作品を著している。すなわち、1615年に出版した戯曲集『いまだかつて上演されたことのない新作コメディア8編と新作幕間劇8編』 (*Ocho comedias y ocho entremeses nuevos, nunca representados*, Madrid) に収録された1編、コメディア (韻文による3幕の戯曲) 『偉大なるスルタン妃ドニャ・カタリーナ・デ・オビエド』 (*La gran sultana doña Catalina de Oviedo*, 以下『偉大なるスルタン妃』と略す)²である。

セルバンテスが著した他のコメディアと同じく、『偉大なるスルタン妃』においても、複数のプロットが同時に進行するが、作品の中核をなすプロットは、幼少のころ、スペインのマラガからオラン (北アフリカのスペイン領城砦都市) へと向かう船に乗っていたところを私掠船に捕らえられてイスタンブルに連れてゆかれ、オスマン帝国のスルタンのハレムに入れられたものの、宦官のルスタン (Rustán) によって匿われる形で成長してきた、スペイン

- 1 セルバンテスの戯曲には、執筆時期をめぐる研究者のあいだで意見が分かれるものもあるが、『偉大なるスルタン妃』は彼の文学活動後期、17世紀初頭に執筆された作品だということで見解が一致している。たとえば、Albert Mas, *Les turcs dans la littérature espagnole du Siècle d'Or (recherches sur l'évolution d'un thème littéraire)*, 2vols., Paris: Centre de Recherches Hispaniques, 1967, I, p. 293; Jean Canavaggio, *Cervantès dramaturge. Un théâtre à naître*, Paris: Press Universitaires de France, 1977, pp. 22-23; Florencio Sevilla Arroyo & Antonio Rey Hazas, "Introducción", in Miguel de Cervantes Saavedra, *La gran sultana. El laberinto de amor (Obra completa 15)*, Madrid: Alianza, 1998, pp. XII-XIII. 後2者は、劇中に言及された歴史的事件から、1607-1608年という具体的な執筆時期を推定している。
- 2 参照と引用にあたり使用した版は、Miguel de Cervantes Saavedra, *La gran sultana. El laberinto de amor (Obra completa 15)*, ed. Florencio Sevilla Arroyo & Antonio Rey Hazas, Madrid: Alianza, 1998である。引用箇所を示すさいは紙面の都合から原文は省略し、論文筆者による日本語訳 (原文は韻文であるが、読みやすさを重視して散文訳とした) のみを示したうえで、訳文直後に () で該当行数を示した。[] は論文筆者の補足を示す。

北部出身でイダルゴ（郷土）階級³に属するスペイン人女性カタリーナ（Catalina）が、スルタンのムラト——テキスト中ではアムラテス（Amurates）と表記されている——⁴に見初められ求愛を受け、紆余曲折をへて、キリスト教信仰を守りつつも彼と結婚し、世継ぎを身ごもるに至るというものである⁵。

セルバンテスは劇作家としては大成功をおさめるにいたらず、20世紀半ばまでの研究においても、その戯曲は、彼の作品全体のなかでは注目されることが少なく、低い評価を受けてきた感がある。しかし、近年は劇作家としてのセルバンテスに関する再評価が進み、彼の戯曲全体についても、個々の作品についても、かなりの数の研究文献が現れている⁶。

『偉大なるスルタン妃』についても先行研究の蓄積があるが、それらの研究では、作中の個々の登場人物・事件がどの程度史実を反映しているかを分析した一部の研究⁷を別にすれば、ムスリム君主との結婚という問題に直面したヒロインのカタリーナのキリスト教信仰と内面的葛藤が最大の焦点となっている⁸。その一方で、この戯曲におけるオスマン帝国は、従来の

3 中・近世のスペイン社会で、貴族と平民のあいだに位置した階級。

4 ムラト 3 世（在位1574-95）をモデルとしていると考えられる。

5 このメインプロットに加え、二つのサブプロットがある。まず、恋愛関係にあるトランシルバニア出身の男女ランベルト（Lamberto）とクララ（Clara）をめぐるプロットがある。トルコ人に連れ去られたクララのあとを追うランベルトは、クララがスルタンのハレムにいることを知り、自らも女装してハレムに入り込み、彼女と再会を果たす。そしてランベルトはゼリンダ（Zelinda）、クララはサイダ（Zaida）という変名で過ごしながらハレムのなかで密会を重ね、クララは妊娠するにいたるのだが、ランベルトがスルタンの目にとまったことからすべてが露見する。しかし、イスラームの預言者の起こした奇跡で自分は女性から男性に変わったのだという弁明をスルタンたちに信じさせて、ランベルトは窮地を切り抜け、しかもカタリーナの口添えでクララとの結婚を実現するとともに、ロードス島のパシヤに任命されるというものである。もう一つのサブプロットは、マドリガル（Madrigal）というスペイン人虜囚をめぐるものである。この虜囚はピカロ（悪漢）的な性格があり、次々とふりかかる難局を機知によって切り抜け、最後はイスタンブルからの脱出を果たす。

6 セルバンテスの戯曲全体に関する先駆的研究（『偉大なるスルタン妃』に関しては、史実との関連や梗概の説明が主である）として、Armando Cotarelo y Valledor, *El teatro de Cervantes. Estudio crítico*, Madrid: Tipografía de la Revista de Archivos, Bibliotecas y Museos, 1915; Robert Marrast, *Miguel de Cervantès dramaturge*, Paris: L'Arche, 1957; Joaquín Casaldueño, *Sentido y forma del teatro de Cervantes*, Madrid: Gredos, 1966を、近年の充実した研究（ただし技巧や演劇理論の面に重点が置かれている）として、Jean Canavaggio, *op.cit.* および Jesús González Maestro, *La escena imaginaria. Poética del teatro de Miguel de Cervantes*, Madrid: Iberoamericana, 2000を挙げることができる。

7 代表的なものは Ottmar Hegyi, *Cervantes and the Turks: Historical Reality versus Literary Fiction in «La gran sultana» and «El amante liberal»*, Newark: Juan de la Cuesta, 1992であり、この戯曲に含まれるオスマン帝国に関する情報の多くが、当時のスペインにおいて印刷物の形で流布していた情報と一致していることを明らかにしている（pp. 22-182）。

8 カタリーナがキリスト教信仰を保持したままスルタンと結婚するというこの戯曲の中核的プロットは、あらゆる障害を乗り越える愛の賛歌、キリスト教徒とムスリムの相互理解や宗教的寛容の精神の具現化としてしばしば解釈されてきた（Francisco López-Estrada, “Vista a Oriente: la española en Constantinopla”, *Cuadernos de Teatro Clásico*, 7 (1992), p. 39; Stanislav Zimic, *El teatro de Cervantes*, Madrid: Castalia, 1992, pp. 183-203; George Mariscal, “«La gran sultana» and the Issue of Cervantes's Modernity”, *Revista de Estudios Hispánicos*, 28 (1994), pp. 185-211; Antonio Rey Hazas, ↗

先行研究において、カタリーナの信仰の問題を際立たせるための単なる舞台設定として軽視されてきたという印象が否めない。本稿では、オスマン帝国の君主とスペイン女性の結婚、そしてそれが象徴するオスマン帝国とスペインの関係のあり方が、16世紀から17世紀にかけての長期にわたる歴史的コンテクストのなかでどのような意味を持つのかという、従来の先行研究では注目されてこなかった切り口から、この戯曲を論じてみたい。

ここで重要となるのが、16世紀のスペインにおいては、自国とオスマン帝国を対峙する二つの世界帝国とみなす意識（以下、便宜的に「西土二大帝国意識」と名づける）、キリスト教世界の盟主としてのスペインがオスマン帝国を打倒することを期待する意識が様々な作家たちのあいだにみられたということである。本稿では、セルバンテスの『偉大なるスルタン妃』がその西土二大帝国という構図を受容しつつも、スルタンとカタリーナの結婚を通して、その構図に16世紀の作家たちとは異なる意味づけや方向性を与えていることを明らかにし、さらにその背景を探ることを目指す。

2. 16世紀スペインにおける西土二大帝国意識

スペイン帝国とオスマン帝国を同等の重みを持った存在、キリスト教世界とイスラーム世界それぞれの盟主、対称的な二大世界帝国と位置づける発想は16世紀の様々なスペイン作家たちにみられるが、それは両帝国が根本的には相容れない存在であることを前提としており、近い将来にスペインがキリスト教勢力の十字軍を主導しオスマン帝国を滅ぼすことへの期待と密接に結びついている。このことはすでに一部の先行研究により指摘されているが⁹、ここでは具体例として、16世紀中葉にスペインで出版ないし執筆された三つの重要なオスマン帝国関連文献を取り上げてみたい。

まず、16世紀に活躍した印刷業者兼作家のバスコ・ディアス・タンコ（Vasco Díaz Tanco, c.1490–c.1560）が著したオスマン帝国王朝史『忌まわしく残忍な民トルコ人に関し語られて

“Las comedias de cautivos de Cervantes”, in Felipe B. Pedraza Jiménez & Rafael González Cañal (eds.), *Los imperios orientales en el teatro del Siglo de Oro. Actas de las XVI Jornadas de teatro clásico. Almagro, julio de 1993*, Almagro (Ciudad Real): Universidad de Castilla-La Mancha/Festival de Almagro, 1994, p. 52)。一方で、カタリーナがイスラームに対するキリスト教の勝利を体現していると解釈する研究（Canavaggio, *op.cit.*, p. 64）や、女奴隷としてハレムに暮らしているカタリーナの自由意思がそもそも制限されていることを根拠に、この作品におけるムスリムとキリスト教徒の関係やスルタンとカタリーナの「愛」を現代的視点で理想化することに否定的な研究（J. Ignacio Díez Fernández, “Sin discrepar de la verdad un punto”. «La gran sultana»: ¿un canto a la tolerancia?”, *Lectura y Signo: Revista de Literatura*, 1 (2006), pp. 301–322) もある。

9 この点を指摘した研究として、A. Mas, *op.cit.*, II, pp. 153–157, 207–216; Miguel Ángel de Bunes Ibarra, *La imagen de los musulmanes y del Norte de África en la España de los siglos XVI y XVII. Los caracteres de una hostilidad*, Madrid: CSIC, 1989, pp. 303–304 が挙げられる。しかしこの二大帝国意識をセルバンテスの『偉大なるスルタン妃』と関連付けた先行研究は、管見の及ぶ限り存在しない。

きたことの集成』(*Libro intitulado palinodia, de la nephanda y fiera nacion de los turcos, Orense, 1547*)¹⁰における西土二大帝国意識をみてみよう。

ディアス・タンコは、スレイマン大帝（1世、在位1520-66）治下のオスマン帝国の隆盛を認めつつも、それは神聖ローマ帝国皇帝カール5世（在位1519-56、スペイン国王カルロス1世としては在位1516-56）による、キリスト教に基づく世界全体——旧大陸と発見された間もない新大陸——の統一の前奏曲に過ぎないと言う。

スレイマンは、帝国の力と広大さにおいて、古今の史書に記されたあらゆる君主を凌駕している。あの落ち着くことを知らぬ暴君がかくも多くの帝国と王国を獲得し手中にしていることを神が容認し給うたのは、全世界をわれわれの不敗の、そして信仰厚きカルロ〔カール5世〕の王国のもとに従えるためである。それはただ一度の勝利で彼を偉大なる君主カエサル・アウグストゥスにすることによってなされるのだ。かくも信仰厚き仲介者によって、カトリックの聖なる教えが勢いを増し、二つの半球で福音の律法が説かれ、いたるところで信仰され守られるようになるために¹¹。

バスコ・ディアス・タンコはこのように皇帝カールに期待するが、その期待はごく当然のこととして、歴代スペイン諸王の系譜という流れのなかで、息子のフェリペ（のちのフェリペ2世）に受け継がれる。ディアス・タンコは同じ『集成』のなかの、フェリペにあてた「序文」で次のように述べている。

殿下は父君たる皇帝カルロス、そしてカトリックにして名誉このうえなき先王たちに常によくならない、スペイン諸王国の力を合わせて、野蛮なモーロ人に対しても、獐猛な民トルコ人に対しても、殿下の輝かしい戦いの力、内面の明瞭な偉大さ、際立った戦術の精緻きわまりない巧みさをお示しになるでしょう。賢明な勇敢さ、沈着冷静な巧みさによって、彼らの落ち着くことのない勢力を壊滅させ、彼らの極悪な軍勢を打ち負かし、彼らの偽りの謀略、欺瞞に満ちた戦術を滅ぼすためです¹²。

以上の引用に読み取ることができるように、スペイン帝国とオスマン帝国を、対決を宿命づけられた二大世界帝国とみなし、キリスト教世界を代表してオスマン帝国に対抗するスベ

10 参照と引用にあたってはファクシミリ版 (Vasco Díaz Tanco, *Palinodia de los turcos. Reimpresión facsimilar de la rarísima edición de Orense 1547*, Badajoz: Institución de Servicios Culturales de la Excma. Diputación Provincial de Badajoz, 1947) を用いた。引用の日本語訳は論文筆者による。

11 *Ibid.*, fol. LIIIr.

12 *Ibid.*, fols. [I]v-[II]r.

イン君主の役割を強調する、これがバスコ・ディアス・タンコの西土二大帝国意識の核心であるが、そのような思考様式は、これから取り上げる、彼以後の二人の書き手たちも反復することになる。

二番目に取り上げるのは、バレンシアの人ビセンテ・ロカ (Vicente Rocca, 生没年不詳) が1556年に上梓した『トルコ人の起源と数々の戦争の歴史』 (*Hystoria en la qual se trata de la origen y guerras que han tenido los Turcos*, Valencia, 1556)¹³——オスマン帝国王朝史に民族誌的記述を加えたもの——である。

ロカはオスマン帝国とヨーロッパの対峙という構図のなかで、スペインとスペイン人に特別な役割を与え——ここでも新大陸の存在が強調されている——、オスマン帝国を滅ぼすことのできる唯一のキリスト教国がスペインだと主張する。

ドイツ人は長年にわたって皇帝を選び帝国 [神聖ローマ帝国] を支えてきたかもしれないが、かの地の大部分に広まっている不信仰と不和 [新旧両教徒の対立のこと] ゆえに、われらの主はすべての権威と権力がスペイン人に移ることを望み給うだろう。そのことをすでにわれわれは目撃し始めている。なぜなら、スペイン人たちはわれらの主君たる王のためにもう一つの半球 [新大陸] の大部分を支配・統治しており、また人の居住する世界の大部分において恐れられているからだ。[中略] 私は同様に、スペイン人がトルコを崩壊させ破壊するに違いないと確信している。なぜなら、われわれにはトルコを平定しようと望んでいる君主がいて、しかもわれわれの罪ゆえに、キリスト教世界にはそのようなことができる者がほかにいないからである¹⁴。

またビセンテ・ロカは、ハプスブルク家とオスマン家がほぼ同時期に始まったことを指摘し、前者が後者を滅ぼして決着するはずの二つの王家のライバル関係が、宿命的なものであるとも強調する。

われわれの主君カルロス [カール] 5世が正統にそこから血を引くオーストリア王家 [ハプスブルク家] の初代皇帝の時代に東方でオスマン家が支配を始めたのは、人知では計り知れないことである [中略]。このことゆえ、このきわめて高貴なる王家 [ハプスブルク家] のいずれかの君主によって不信心者たるトルコ人たちが滅ぼされるはずだと期

13 参照と引用にあたってはスペイン国立図書館所蔵の初版本 (Vicente Rocca, *Hystoria en la qual se trata de la origen y guerras que han tenido los Turcos, desde su comienzo hasta nuestros tiempos: con muy notables successos que con diuersas gentes y nasciones les han acontecido: y de las costumbres y vida dellos*, Valencia: Juan Navarro, 1556) を用いた。引用の日本語訳は論文筆者による。

14 *Ibid.*, fol. LXXXI^r.

待すべきなのである¹⁵。

だが、ハプスブルク家といっても、ピセンテ・ロカが念頭に置いているのは、あくまでスペインのハプスブルク家である。バスコ・ディアス・タンコと同様ロカにとっても、オスマン帝国のスルタンと並び立つ存在、ヨーロッパの防衛者としてのカール5世の役割は、次代のスペイン国王に受け継がれるべきものなのだ。「もし [オスマン帝国を滅ぼすという] この幸福と幸運が皇帝陛下 [カール5世] のものでないならば、われらのいと高貴なる皇太子殿下に神がそれを授け給うであらうと私は確信する」¹⁶。

三番目に取り上げるのは、1550年代後半に執筆されたと考えられる（ただし20世紀に入るまで刊行されなかった）作者不詳の対話篇『トルコへの旅』(*Viaje de Turquía*)¹⁷である。この対話篇は、スレイマン大帝治下のイスタンブルに虜囚として抑留され、そこで医師として活躍したのち、脱走してスペインに帰国したペドロ・デ・ウルデマラス (Pedro de Urdemalas) が、再会した二人の友人に、自己の体験と見聞を伝えるという設定の作品である。

ペドロはその回想のなかで、オスマン帝国の实在の大宰相リュステム・パシャ (c. 1500-61) に面会したさい、彼とともに世界地図の上で西土両帝国の領土の広さを比べたときのことを次のように語るが、この興味深い場面は、まさに西土二大帝国意識を象徴的に示していると言えよう。そしてここでもバスコ・ディアス・タンコ、ピセンテ・ロカと同様、新大陸が小道具となっており、新大陸とヨーロッパの領土を合わせるとカール5世の支配領域はスレイマン大帝のそれを凌駕するという、スペイン寄りの結論にいたるのである。

私は彼 [リュステム] に言った。「では閣下にお教えいたしますが、皇帝 [カール5世] はフランス王と大トルコ [スルタン]¹⁸を合わせたよりも強大です。彼が持つ領土の最小の部分がスペイン、ドイツ、イタリア、フランドルだからです。じっさいにご覧になりたければ、世界地図を持ってこさせてください」。[中略] 地図が届くと、私は彼にコンパスを使ってトルコ [スルタン] が支配する領域すべてを測らせた。それはインディア

15 *Ibid.*, fol. XXXIIIv.

16 *Ibid.*, fol. XXXIIIv.

17 参照と引用にあたっては、*Viaje de Turquía*, ed. Marie-Sol Ortola, Madrid: Castalia, 2000を用いた。引用の日本語訳は論文筆者による。この対話篇の主要な部分は1555年ないし1556年から1557年にかけて執筆され、その後様々な加筆修正が施されたと考えられる (Ortola, “Introducción crítica”, in *Viaje de Turquía*, pp. 74-82; Ortola, ed., *Viaje de Turquía*, p. 712, n. 1035)。

18 オスマン帝国の君主については、今日の研究では「スルタン」(スペイン語で *sultán*) という呼称が一般的であるが、16-17世紀のスペイン語文献では、スルタンは「スルタン」ではなく「大トルコ (人)」(*Gran Turco*)あるいは単に「トルコ (人)」(*Turco*) と呼ばれることが多い (これは同時代の他の欧語文献でも同様で、たとえば英語では *Grand Turk* と呼ばれていた)。

ス〔新大陸〕に及ばず〔中略〕彼はとても驚いた¹⁹。

そしてオスマン帝国をスペインによって軍事的に打ち負かされるべき敵とみなしている点、キリスト教ヨーロッパ世界とオスマン帝国のあいだで生じる戦いの先頭に立つのはスペイン君主であると位置づけている点においても、『トルコへの旅』の作者は、バスコ・ディアス・タンコヤピセンテ・ロカと変わらない。たとえば、カール5世の後継者であるスペイン国王フェリペ2世（在位1556-98）にあてた²⁰冒頭の「献辞」のなかで、作者は次のように述べている。「陛下はカトリック信仰に残されたわずかな支えのなかで、最も頼りがいのある支えです。そしてまた、陛下がその願いを実現する妨げとなる最大枢要の敵〔中略〕が大トルコ〔スルタン〕であることも存じ上げております」²¹。また対話のなかでも、主人公ペドロは次のように述べている。「もしわれらの不敗の皇帝陛下〔カール5世〕がこの軍勢（オスマン軍）に向かって出陣する余裕があれば、相手が連れている人数の十分の一の手勢だけで、狼の歯をへし折ることができるだろう」²²。

3. 『偉大なるスルタン妃』における西土二大帝国意識

では、17世紀初頭にセルバンテスが執筆・発表した戯曲『偉大なるスルタン妃』において、スペインとオスマン帝国の関係はどのように描かれているのだろうか。

この戯曲においては、スペインとオスマン帝国の関係について体系的な論述がなされていないが、登場人物たちの発言や行動を注意深く追ってゆくと、直接的あるいは間接的に、スペインとオスマン帝国が対称的な二つの帝国として描かれていることがわかる。そこに我々は、一面において、16世紀中葉のバスコ・ディアス・タンコヤピセンテ・ロカ、『トルコへの旅』から続く、西土二大帝国意識の継続を読み取ることができる。しかし、セルバンテスの戯曲においては、16世紀の作家たちとは異なり、西土二大帝国意識は強い敵対感情よりも、むしろ両帝国の融和という精神によって規定されている。

戯曲はまず、金曜礼拝に向かうスルタンの壮麗華美な一行を見て驚愕する、（キリスト教からイスラームへの）改宗者ロベルト（Roberto）とトルコ人サレク（Salec）の会話から始まる。ここでまず、繁栄するオスマン朝の大帝国としての栄華が、受容者に対し提示される。

19 *Viaje de Turquía*, pp. 354-356.

20 スペイン国王フェリペ2世あてのこの「献辞」の末尾に付された日付は、1557年3月1日である。しかしこれはおそらく、執筆過程の最後になって付け加えられたものだと考えられ、作品中には、皇帝カール5世が在位中であることを前提とした記述もみられる（Ortola, ed., *Viaje de Turquía*, p. 712, n. 1035）。対話本編から引用した二つの箇所は、皇帝カール5世を念頭に置いている。

21 *Viaje de Turquía*, p. 160.

22 *Ibid.*, p. 712.

サレク どう思う、ロベルトよ、ここで君の目に映った華やかさと荘厳さは？
ロベルト 本当のことを言うと、信じられない、確かなことであるのに疑ってしまう。
サレク 徒歩で、そして馬に乗って、進んでいるぞ、6千の兵が。
[中略]
ロベルト 感嘆、喜悅そして驚嘆が一緒になったようだ。
サレク 礼拝に出るときは、このようなお供を従えるのだ。(50-61行)

その後、主としてこの繁栄するオスマン帝国側の登場人物たちの発言を通して、スペインとオスマン帝国の関係に関する言及がなされてゆくことになるのだが、彼らの発言からは、オスマン側がスペインを自らに匹敵する大帝国として意識しつつ、敵対心よりむしろ融和の精神を抱いていることが明らかになってゆく。まず、そうした発言を検証していきたい。

『偉大なるスルタン妃』では、スンナ派イスラームのオスマン朝と当時敵対関係にあったシーア派イスラームのサファヴィー朝ペルシアが和平交渉のためイスタンブルに派遣した使節とオスマン帝国の重臣（パシャ）たちが会見する場面において、スペインを自国に匹敵するもう一つの大帝国として意識するオスマン側の心理が最初に示される。

この場面でオスマン側は、ペルシアが自分たちとの和平交渉に先立ってスペインに反オスマン同盟のための使節を送った²³ことを次のように非難するが、ここにはスペインとの同盟と自分たちとの和平をペルシア側が天秤にかけた——そして前者が挫折してから後者を選択した——ことへの苛立ちが込められている。「スペインの偉大なる王はその宮廷で多くのペルシア人を謁見したそうだな、そなたの主君の事績というのがこれだ。キリストを崇める者に支援を求める。そして彼に支援を断られたとみるや、臆病な和平を卑しく懇願するのだ」(1036-41行)。

そしてペルシア使節がスペイン王フェリペ3世（在位1598-1621）を礼賛し、「太陽もその歩みのなかでその諸王国を途切れることなく目にするあのお方」(1048-49行)の名声を知った自分の主君に「未知の道を通して、様々な海と国々を渡って、偉大なる王に会いに行くように」(1055-57行)命じられたのだと述べると、オスマン帝国のパシャたちの怒りは頂点に達する。「こんなことを言わせておくのか？ 外へ放り出せ。おべっか使いめ、行くがよい、キリスト教徒の大使め。こいつを追い出せ」(1057-59行)。

この場面においては、オスマン帝国の宮廷人たちは、ペルシア人がスペイン国王を礼賛し、スペインをオスマン朝より上位に置くことに憤慨する。それはスペインとオスマン帝国が並

23 スペインとサファヴィー朝の同盟交渉は史実であり、17世紀初頭にじっさいにペルシア使節がスペインを訪れている (Florencio Sevilla Arroyo & Antonio Rey Hazas, *op.cit.*, p. XII; Canavaggio, *op.cit.*, pp. 22-24)。

び立つ二大帝国であるという認識を前提としているのだが、引用したやり取りには、西土両帝国間に漂う軍事的な緊張感の残滓もみられる。

しかしながら、スペイン・ペルシア同盟が成立せず、西土間の軍事的衝突の懸念が去った今、オスマン帝国の重臣たちにとって、目下の敵、敵対感情が直接向かう先はあくまでペルシアである。それはペルシア使節が追い払われたあと、一人のパシャがスルタンに向ける言葉で明らかになる。「われわれにはペルシアが害をなしておりますが、それはフランドルがスペインに対してなしているのと同じです」(1080-81行)。この言葉には、シーア派イスラームのペルシアとの戦いを強いられるスンナ派イスラームのオスマン帝国の状況と、フランドルのプロテスタントとの戦いを強いられるカトリックのスペインの状況が並置されている。ここでは、オスマン帝国のパシャの言葉のなかに、敵対心よりも、宗派がらみの戦争に苦しむ帝国どうしの一種の共感を読み取ることができる。

このペルシア大使の一件のあとは、スルタンとカタリーナの結婚話が進むにつれて、この戯曲に登場するオスマン朝の人々がスペインに融和的であることが目を引くようになる。『偉大なるスルタン妃』という作品全体の基調となってゆくのは、西土両帝国の融和というこの側面である。

次に取り上げる場面では、ほかならぬスルタンが、カタリーナと自分の結婚を、二つの偉大な血統の結合とみなしている。スペイン人の高貴さを強調し、スペイン人の血を称えるオスマン側の見方を、スルタン自身の言葉が示している。

ムスリム君主との結婚に躊躇するカタリーナが「あなたの一介の奴隷に妻の栄誉をお与えになろうというのですか？ よくお考えになってくださいませ、すぐに後悔なさるに違いありません」(1200-03行)と言うのに対し、スルタンは次のように言う。

考えたうえでのことだ、それにこの件で極端なことをしているわけでは決してないのだ。

すでに余は大胆にも、オスマンの血にそなたのキリスト教徒の血を合わせ、より良いものにしようとしておるのだから。

余がそなたから期待している子がもし頂に至れば、世界は悟るであろう、そなたが最初に余に与える男子に並ぶ者はいないはずだと。

そのとき太陽は、自らが周囲をめぐる限りの世界のどこにも見出してはいないであろう、誰であれ、スペインの血を継ぐオスマン家の者に匹敵する者は。(1204-17行)

さらにスルタンは、カタリーナへの求婚のさい、自分との結婚が彼女にとって不名誉ではないことを強調する。それは、オスマン家が高貴だからという根拠に基づいている。

トルコ [スルタン] オスマン家のカタリーナとそなたは呼ばれるであろう。

スルタン妃 私はキリスト教徒です。そのような姓は受け入れられませぬ。私の姓はオビエド、高貴で、高名な、キリスト教徒の姓です。

トルコ [スルタン] オスマンの姓は卑しくないぞ。(1167-72行)

これらの引用にみられるように、スルタンはオスマン家にスペインの高貴な女性の血²⁴が入ることを肯定すると同時に、オスマン家の高貴さをも強調し、カタリーナはキリスト教信仰を保障されるだけでなく、ムスリムではあるが高貴な血統に連なる君主との結婚によって、名誉も保障されるのだと言う。カタリーナと自分の双方の血統の高貴さを強調するスルタンのこのような発想²⁵には、イスラーム世界の盟主であるオスマン帝国と、キリスト教世界の盟主に位置づけられたスペインを並び立つ二大帝国とみなす、バスコ・ディアス・タンコヤビセンテ・ロカ以来の意識が、敵対感情を排した形で継承・反映されていると考えられる。

また、この戯曲の結末近くでは、宮廷に仕える宦官ルスタンも、次のようにカタリーナを祝福するとともに、彼女がスルタン妃となったことがスペインとスペイン人にとっても名誉であることを強調するが、これは作品そのものの精神でもあるだろう。「声を上げるがよい、少年たちよ。大声で、偉大なるスルタン妃カタリーナ万歳と。偉大なるキリスト教徒のスルタン妃、若くして、キリスト教徒として、栄光と名誉となり、自らの属する国民と祖国の名誉でもある [後略]」(2953-57行)。

以上みてきたように、『偉大なるスルタン妃』においては、オスマン帝国側の人々は、スペインを自らに匹敵する特別な存在とみなす意識をいざいしている一方で、そこにスペインに対する敵対心よりも融和的な思いを強く込めていることが、スルタンのカタリーナへの真摯な求婚を通して明らかになってゆく。16世紀のスペイン作家たちが与えたものとは異なる意

24 カタリーナの家系はイダルゴ(郷土)で、大貴族というわけではない。しかし貴族の称号の有無とは別に、この時代のスペインにおいては、異教徒(ムスリムやユダヤ教徒)の血が混じっていない——これは「血の純潔」(limpieza de sangre)と呼ばれる——キリスト教徒すなわち「旧キリスト教徒」(cristiano viejo)の家系は、高い社会的威信を得ていたことを忘れてはならない。カタリーナがスペイン北部出身であり、とりわけ「オビエド」という、スペイン北部アストゥリアス地方——8世紀のイスラーム教徒のイベリア半島侵攻に始まるイスラーム・スペインの時代もその支配下に入らず、キリスト教徒による国土回復運動(レコンキスタ)の出発点となった——の中心都市に由来する姓を持つことは、彼女の家系が代々続く「旧キリスト教徒」のそれであることを強く示唆している。この戯曲が強調するカタリーナの「高貴」さは、社会的な身分というよりもキリスト教と強く結び付いている。そしてそのようなカタリーナがムスリムであるスルタンと結ばれる点が重要なのである。

25 この時代のスペインにおいては、ムスリムであっても君主の血統に連なる者はその高貴さが認められ、敬意を払われていた(詳細は Beatriz Alonso Acero, *Sultanes de Berbería en tierras de la cristiandad. Exilio musulmán, conversión y asimilación en la Monarquía hispánica (siglos XVI y XVII)*, Barcelona: Bellaterra, 2006, pp. 20, 217-222, 226-227, 243-284 を参照)。それゆえスルタンの言葉は、同時代のスペインの受容者にとって必ずしも奇異には響かなかったと考えられる。

味づけを与えられた二大帝国意識を、この戯曲に登場するオスマン側の人々は示しているのである。

では、そのようなオスマン側の見方に対応するスペイン側の見方は、この戯曲のなかでどのように描かれているのかというと、スペイン側の登場人物がオスマン帝国について具体的に何かを語る場面はほとんどないが、彼らの言動から間接的に、オスマン帝国が示す融和的な姿勢を受け入れる見方を読み取ることができる（付言すると、なぜスペイン人の登場人物たちにオスマン帝国に対する明白な好意を表明させることをこの戯曲が避けているのかと言えば、イスラームとの長い戦いの歴史を持つスペインにおいては、スペイン人たちにオスマン帝国やトルコ人に対する好意を語らせるよりも、トルコ人たちにスペインやスペイン人に対する好意を語らせる方が容易であったからだと考えられる）。

スペイン人の登場人物たちについてみていくと、まず、逡巡しつつもスルタンの求愛を受け入れ結婚し、世継ぎを身ごもるカタリーナの行動自体が、オスマン帝国に対するスペイン側からの拒絶ではなく、融和的な姿勢を象徴していると考えられる。

また興味深いのが、カタリーナの父である。『偉大なるスルタン妃』では、紆余曲折の末にこの父も虜囚としてイスタンブルに居合わせているのだが、仕立屋に身をやつした父がスルタンの宮殿で娘と再会したさい、父は異教徒君主との結婚を考える娘を最初は許すことができず、その死を願ひさえする。「神が嘉し給いますよう、お前の衣装を形作るこの飾り結びが、お前を私の腕のなかで墓に導くことを！」(1833-36行)。

だが、カタリーナがスルタンと結婚して子を宿し、父もうやむやのうちにイスタンブルで生活を選択するという『偉大なるスルタン妃』の結末は、この父の価値観——オスマン帝国の拒絶——と作者セルバンテスのそれとのあいだの距離を示していると考えられる。

このように、『偉大なるスルタン妃』においては、スペインとオスマン帝国が並び立つ二大帝国であるという16世紀いらいの構図が継承されているのだが、スペインとオスマン帝国がともに高貴であることを強調してカタリーナに求婚するスルタンと、最終的にそれを受け入れるカタリーナ、そして二人の結婚を祝福する周囲の祝祭的な雰囲気によって、両帝国の対立ではなく、むしろ「スペインの血を継ぐオスマン家の者」(un otomano español) というスルタンの言葉がまさに象徴する融和——そこでは当然、将来におけるオスマン朝の滅亡ではなく、継続が前提となっている——が強調されているのである。このような視点は、スペインがオスマン帝国を滅ぼすことを期待していた、先に引用した16世紀の作家たちとは大きく異なるものである。

4. 歴 史 的 背 景

では、このように16世紀作家たちとは違った意味づけをなぜセルバンテスは『偉大なるスルタン妃』において西土二大帝国意識に与えたのだろうか。その一つの要因として、西土関係の変化という歴史的背景を指摘できるだろう。

16-17世紀において、スペインとオスマン帝国とのあいだの関係の基調は軍事的対立であり、友好関係を取り結ぶことは決してなかった。しかし、両国の軍事的対立には濃淡があったのも確かである。スペインとオスマン帝国の軍事的対立は1571年のレパントの海戦が頂点であり、1573-74年のチェニス攻防戦が、両国のあいだに生じた最後の直接の軍事衝突である。そして1581年の休戦²⁶以後、大規模な軍事衝突は起こらなくなる。

この休戦協定はスペイン国内で宣伝されたわけではないし、両国が友好関係に移行したわけでもない。オスマン中央政府の統制に従わない、アルジェなどの港市を拠点とする北アフリカ私掠船団の活動はその後も続き、スペインに大きな人的・経済的被害を与えた²⁷。しかし、スルタンの意思で行動するオスマン軍とスペイン国王の意思で動くスペイン軍の軍事衝突が起こらなくなったのは事実である。セルバンテスが休戦協定の詳細を知っていたかどうかはわからない。だが戯曲『偉大なるスルタン妃』にみられるオスマン帝国への眼差しは、両国間の緊張緩和という、スペインとオスマン朝をめぐる情勢の大きな変化をセルバンテスが認識していたこと、オスマン帝国をスペインが滅ぼすという期待が非現実的な夢にすぎないことを彼が悟っていたことをうかがわせる。

セルバンテスは歴史的現実としての西土緊張緩和を認識しつつ、オスマン帝国のスルタンとスペイン人女性の結婚という形で、フィクションのなかでそれを象徴化したのだと考えられる。

5. 結 び

以上みてきたように、オスマン帝国の強大さを認識し、オスマン帝国と自国スペインを並び立つ二大世界帝国とみなしている点では、16世紀の作家たちもセルバンテスも変わらない。

26 この休戦交渉に関しては、Fernand Braudel, *La Méditerranée et le monde méditerranéen à l'époque de Philippe II*, 2 vols., Paris: Armand Colin, 9^e éd., 1990 (1^e éd, 1949), II, pp. 431-450 および María José Rodríguez Salgado, *Felipe II, el «Paladín de la cristiandad» y la paz con el Turco*, Valladolid: Universidad de Valladolid, 2004を参照。

27 Ellen G. Friedman, *Spanish Captives in North Africa in the Early Modern Age*, Madison: The University of Wisconsin Press, 1983, pp. 3-28.

だが、16世紀のスペイン作家たちが、相似の大帝国たるオスマン帝国をスペインが将来打倒することを期待し、その期待を文章のうえで表現したのに対し、17世紀初頭に執筆されたセルバンテスの『偉大なるスルタン妃』においては、16世紀以来の西土二大帝国意識が継続しつつも、その意味づけに変化が生じている。西土休戦後に執筆されたこの戯曲においては、オスマン帝国はスペインによって滅ぼされるべき対象とはみなされていない。そして、スルタンと結婚しその世継ぎを産むスペイン人女性カタリーナを通して、二大帝国の融和が象徴的に描かれているのである。

参 考 文 献

- Alonso Acero, Beatriz, *Sultanes de Berbería en tierras de la cristiandad. Exilio musulmán, conversión y asimilación en la Monarquía hispánica (siglos XVI y XVII)*, Barcelona: Bellaterra, 2006.
- Braudel, Fernand, *La Méditerranée et le monde méditerranéen à l'époque de Philippe II*, Paris: Armand Colin, 1949. 4^e éd., revue et corrigée, 2 vols., 1979. 9^e éd., 2 vols., 1990.
- Bunes Ibarra, Miguel Ángel de, *La imagen de los musulmanes y del Norte de África en la España de los siglos XVI y XVII. Los caracteres de una hostilidad*, Madrid: CSIC, 1989.
- Canavaggio, Jean, *Cervantès dramaturge. Un théâtre à naître*, Paris: Press Universitaires de France, 1977.
- Casalduero, Joaquín, *Sentido y forma del teatro de Cervantes*, Madrid: Gredos, 1966.
- Cervantes Saavedra, Miguel de, *La gran sultana. El laberinto de amor (Obra completa 15)*, ed. Florencio Sevilla Arroyo & Antonio Rey Hazas, Madrid: Alianza, 1998.
- Cotarelo y Valledor, Armando, *El teatro de Cervantes. Estudio crítico*, Madrid: Tipografía de la Revista de Archivos, Bibliotecas y Museos, 1915.
- Díaz Tanco, Vasco, *Palinodia de los turcos. Reimpresión facsimilar de la rarísima edición de Orense 1547*, Badajoz: Institución de Servicios Culturales de la Excm. Diputación Provincial de Badajoz, 1947.
- Díez Fernández, J. Ignacio, "Sin discrepar de la verdad un punto'. «La gran sultana»: ¿un canto a la tolerancia?", *Lectura y Signo: Revista de Literatura*, 1 (2006), pp. 301-322.
- Friedman, Ellen G., *Spanish Captives in North Africa in the Early Modern Age*, Madison: The University of Wisconsin Press, 1983.
- Hegyí, Ottmar, *Cervantes and the Turks: Historical Reality versus Literary Fiction in «La Gran Sultana» and «El amante liberal»*, Newark: Juan de la Cuesta, 1992.
- López-Estrada, Francisco, "Vista a Oriente: la española en Constantinopla", *Cuadernos de Teatro Clásico*, 7 (1992), pp. 31-45.
- Maestro, Jesús González, *La escena imaginaria. Poética del teatro de Miguel de Cervantes*, Madrid: Iberoamericana, 2000.
- Mariscal, George, "«La gran sultana» and the Issue of Cervantes's Modernity", *Revista de Estudios Hispánicos*, 28 (1994), pp. 185-211.
- Marrast, Robert, *Miguel de Cervantès dramaturge*, Paris: L'Arche, 1957.
- Mas, Albert, *Les turcs dans la littérature espagnole du Siècle d'Or (recherches sur l'évolution d'un thème littéraire)*, 2 vols., Paris: Centre de Recherches Hispaniques, 1967.
- Ortola, Marie-Sol, "Introducción crítica", in *Viaje de Turquía*, Madrid: Castalia, 2000, pp. 11-131.
- Rey Hazas, Antonio, "Las comedias de cautivos de Cervantes", in Felipe B. Pedraza Jiménez & Rafael González Cañal (eds.), *Los imperios orientales en el teatro del Siglo de Oro. Actas de las XVI Jornadas de teatro clásico. Almagro, julio de 1993*, Almagro (Ciudad Real): Universidad de Castilla-La Mancha / Festival de Almagro, 1994, pp. 29-56.
- Rocca, Vicente, *Hystoria en la qual se trata de la origen y guerras que han tenido los Turcos, desde su comienço*

- hasta nuestros tiempos: con muy notables successos que con diuersas gentes y nasciones les han acontecido: y de las costumbres y vida dellos*, Valencia: Juan Navarro, 1556 (スペイン国立図書館, R-14809).
- Rodríguez Salgado, María José, *Felipe II, el «Paladín de la cristiandad» y la paz con el Turco*, Valladolid: Universidad de Valladolid, 2004.
- Sevilla Arroyo, Florencio, & Antonio Rey Hazas, “Introducción”, in Miguel de Cervantes Saavedra, *La gran sultana. El laberinto de amor (Obra completa 15)*, Madrid: Alianza, 1998, pp. XII–XXXIV.
- Viaje de Turquía*, ed. Marie-Sol Ortola, Madrid: Castalia, 2000.
- Zimic, Stanislav, *El teatro de Cervantes*, Madrid: Castalia, 1992.

Summary

From Antagonism to Reconciliation between Two Great Empires: A Study of Cervantes’ *La gran sultana*

Yasuhiro MIKURA

This study analyzes, in a historical context, how Miguel de Cervantes (1547–1616) depicted the relationship between Habsburg Spain and the Ottoman Empire in his play *La gran sultana* (*The Great Sultana*), published in the 1615 volume *Ocho comedias y ocho entremeses nuevos, nunca representados* (*Eight New Plays and Interludes, Never Performed*).

In the sixteenth century, various Spanish writers believed that the Spanish and Ottoman Empires were the two great universal empires and were predestined to clash. The writers hoped that the Spanish Empire, as the leader of the Christendom, would destroy the Ottoman Empire, the leader of Islam, in the future.

La gran sultana, written after the Hispano-Ottoman armistice of 1581, also regards the Spanish and Ottoman Empires as two great empires of equal standing. However, this Cervantine play, in which an Ottoman Sultan falls in love with a female Spanish captive of noble blood and marries her amid much festivity, instead of emphasizing the enmity between the two empires, interprets their relationship in a new way by focusing on their reconciliation.